

文芸

俳句

ハンググライダー飛んで夏めく九十九里

池田 逸子

手枕の気儘な夕べ麦の秋

伊藤 敬子

路迷い記憶に似たる梅雨の路地

伊藤 定男

梅雨出水愛犬の足拭ひけり

今関満喜子

こき人の忘れ物なり夏帽子

魚地 照子

画布染めし風もみどりや聖五月

江森 悦子

梅雨晴れや人柄惚ふ友の葬

大木 素風

初夏の風カットせし髪爽やかに

大谷 武彦

ぶゆ飛んで明日は雨と云ふ翁

川島 孝夫

書に飽いてテレビに飽いて梅雨長し

川島 通則

球音のにぎわう初夏の池めぐり

桑名 大行

古城址青田の波を俯瞰せり

向後 寛

竹箸のうどんが逃げる五月雨

小松 藤男

花の鉢買ふ意欲まだ風光る

佐瀬 輝夫

口ザリオの祈りひそやか聖五月

宍倉 道子

長梅雨に雑草しかと地を奪う

鈴木とし子

藻の花の揺れて波紋の光りけり

玉虫 栗扇

里山の訪れ早きほととぎす

戸村 静華

喜びを後ろ姿で苗と植う

長谷川正子

降り足らぬ空を残して走り梅雨

山口 一秋

書と読めば音無く梅雨の忠伝ふ

山口 とし

熱れ麦の穂波を渡りゆく風は

絹揉むごときやさし音たつ

初月給貰ひし男の孫

佐瀬 初音

長生きしてねと養命酒くれぬ

平山 芳子

幼児が流す笹舟用水路の

段差越すときスピード増せり

西山満里子

朝日受け艶を増したる木斛は

庭木の中に輝きてぬつ

鈴木まさ子

うかつにも転びて腰に怪我を負ひ

いたみを耐えて医師をまらたり

池田 春江

こき夫の使ひてぬだる草刈機

使ひこなせず今日は処分す

田崎 尚実

じゃが芋の白く小さき花咲きて

臯月の畑にさ揺ぎぬるも

島田ますみ

筑よりしたたり落つる水の輪は

夕つ光りと綾なし反す

選者 齊藤つね子

思い出の糸をつむむて語らえげ

夫婦となりてよくぞここまで

越川 義則

この秋の米価は如何にならうとも

苗の成長見るは頼もし

土屋 好

リハビリの出来る段階今日よりは

退院近しと希望うかびぬ

鈴木 益郎

柿の枝繁りに繁り小さき実と

多に付けぬつ切らずに置かむ

押尾 輝子

短歌

いただきし給付金を元手とし

デジタルテレビ速く買ひきぬ

青木 秀子

軒下に忘れ置きたる花鉢に

一人静の花咲きぬたり

八角 三枝

笹舟を競ひ遊びし家前の

小川もいつしか暗渠となりぬ

芹川 初子

老いてなを若き友らと競ひつつ

短歌を詠むが我の生き甲斐

吉岡 信子

柿の枝繁りに繁り小さき実と

多に付けぬつ切らずに置かむ

押尾 輝子

こうほう博物館 16

中国から伝わった石斧

十五年ほど前、篠本城跡

の発掘調査をしていいる時、

地元の方が神山台の自分の

畑から拾ったという遺物を

持ってきた。その中に

細長くて断面が四角く、全

体が磨かれ、刃先が鋭い、

薄緑をした石がありまし

た。長さが一〇cm、幅が三

cmで、重さが三三九gあり、

元から刃までほとんど幅が

同じで、断面が四角いこと

から、角柱状鑿形石斧と言

う石器でした。この石斧は

その形の特徴から、今から

二千年前の弥生時代中期の

石器で、もともと中国から

伝わったもので、木材のホ

ゾ穴を開けるのに使われた

と言われています。神山台

遺跡からは弥生時代の土器

は出土していませんが、近

くの神山谷遺跡からは発掘

調査で同時代の住居跡が見

つかっています。なぜかこ

の東総地域では以前から、

弥生時代の有角石器とい

う石器が単独で出土する

ことが多く、町内でも芝崎

の中島遺跡で出土してい

ます。弥生時代中期とい

てもこの地域は、ようやく

縄文時代から弥生時代に

替わったばかりで、ようや

く新しい時代への息吹が

芽生えた頃です。そのよう

な中で、革新的な石器のみ

が真っ先に入ってきたこ

とは、新しいもの、変わっ

たものを先取る気風が、

この地の人々は当時から

あったのかもしれない。



▶石斧